



2018年へのひと言

この伝統を誇りに

## 同じ境遇の仲間に関まれ、 頑張っている友達同士で 時に励ましあった大学時代

小宮多喜次 専修大学校友会会長

### 編入に専修大学教授のアドバイス 新たな友、そして校友会と出逢う

新年、あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いたします。昨年は校友会創立130周年を迎えました。130年という大きな節目を迎えたこともあり、校友会活動の中心である各支部での活動が活性化しています。また大学発展への支援、学問・体育振興への寄付などをはじめいくつかの新規事業についても推進してまいりました。新たな年を迎え、この流れを継続し、校友会の一層の発展と大学への支援協力を持続させていきたいと思っております。

さて、現在の私自身につながる思い出ということですが、たくさんありすぎてなかなか限定するのは難しいものがありますので、専修大学入学当時のエピソードからお話したいと思います。

私はもともと東京電機大学短期大学へ進学しました。高校は工業高校でし

たので、将来は技術者になるものと思っていたのです。短大から東京消防庁に就職し、やがて人事課勤務となりました。そこで病気の方、素行に問題のある方などの処分を決める懲戒分限を担当する立場となったのです。「これは法律を知らなくては仕事にならない」と考え、仕事を続けながら夜間で通える大学を探したのです。ちょうど新聞の小さな広告で見つけたのが専修大学でした。

電話をすると、「成績証明書、卒業証明書を持参すれば3年次に編入可能」と説明されました。そこで神田校舎へ行くと、受付してくださった先生が「君は電機工学系だから3年への編入はできない。2年なら可能だ」と言うわけです。2年生のうちに短大で履修していない一般科目を取れば、法学部に編入できる、と親切に対応してくださったのです。普通なら資格がなければそれで編入はできない、と言われそうなものですが、担当してくださった法学

部の教授のアドバイスで編入することができました。「いい先生のいる、いい学校だな」と心から思いましたよ。残念ながら直接授業を受けることはなく、お名前も失念してしまいましたが、先生との出会いがなければいまの自分はなかったのではと、とても感謝しています。

そのとき、私と一緒に夜間に通った警察官がいました。彼とは短大で知り合ったのですが、山形出身の人で、地元の所轄での成績が良く、警察庁へ引っ張られたのです。すでに階級は巡査部長でしたが、彼も仕事上、大卒の資格が必要ということだったので、私が電話で連絡し、専修大学はどうだと勧めたわけです。

彼は警察官、私は消防官という似た境遇で、とても近いものを感じていました。仕事で講義に出席できない時など、お互いにノートを交換するなど持ちつ持たれつでした。非番のタイミングが合えば、よく一緒に遊ぶこともありました。彼は山形の湯沢近くの出身で、実家に遊びに行ったこともあります。警察庁にいましたが、やはり最後は地元に戻りたいということで山形に戻って署長に就任し、職務をまとうしました。私も最後は消防官1万

8000名のトップである東京消防庁消防総監に就任しました。

さて、私が専修大学に編入した当時、東京消防庁では「大卒甲」という大卒の幹部候補生の募集要項が新たに加わりました。私が短大卒の資格のままでしたら、新たに入ってきた大学新卒者の下に就くことになったのですが、「なにくそ、こっちは叩き上げだ!」という気概もあります。仕事と両立させながらなんとか大学を卒業し、職務上の階級試験も彼らと同等となるよう頑張りました。やっと同じスタートラインに立てたな、とひと安心したものでした。

ほかにも私と同じく昼間は仕事で頑張っている仲間が大勢いました。われわれの世代はそういう時代で、家が金持ちでなければ進学もままならないことが普通でした。同じ境遇の仲間に関まれ、頑張っている友達同士で時に励ましあって、よい付き合いができた大学生活を送れたと思います。

その後、昭和51年に江戸消防記念会の組頭に就任された方のお祝いの席に参加しました。当時、学校法人専修大学理事長だった森口忠造先生とその場で出会い、「君は専大か。あす校友会に来なさい」と言われ、以来、校友会の活動を担当させていただくことになったのです。あの出会いがなければ、現在のような校友会での立場にはなかったかと思います。



1976年、故・森口理事長とのスナップ。江戸消防記念会の組頭に就任された方を祝う席での一枚。理事長との出会いを機に校友会活動へ。右が小宮会長

### 学問を庶民のものにした 建学の精神をいま振り返ろう

一昨年から校友会会長として、各支部の活動に積極的に参加させていただきました。日本全国、どこへ出向いても各地に専修大学校友会のご活躍がある。私も一人の卒業生としてとても嬉しく感じた点です。また中国、韓国、台湾をはじめ外国にも卒業生がいます。皆さんとお会いするなかで、校友会の130周年という長い歴史と輝かしい伝統をしっかりと継承していくことを改めて意識し、決意しました。専修大学には、戦後に創設された大学とは異なり、明治13年創立という歴史がありません。歴史や伝統というのは一度に出来るものではありません。この伝統はわれわれ校友会メンバーのみならず、すべての卒業生、現役学生、教職員関係者みなさんともに誇りに感じていただきたいと思っております。

専修大学の創設時、他大学のほとんどが外国語で授業を行っていました。日本に法律が整備される前だったこともあり、外国の法律をそのまま教えるために外国語だったのです。しかし専修大学では「日本語で教えなくてはいけない」と、当時の教授陣が日本語で授

業を行ったのでした。学問を成すには、まず外国語という語学の壁を越えなくてはならなかったのを、専修大学が勉学を市民に身近なものとしたのです。市井の大学として、学問を庶民のものにした、長い歴史の功績の一部です。その時代から、いよいよ専修大学創立140周年が間近に迫ってきましたが、こういった数々の歴史の積み重ねであることを今一度振り返り、感謝を持って創立140周年を迎えたいと思っております。

### 東京の都心部、 神田にある大学として その魅力をますますアピールする

まもなく専修大学が創立140周年となり、石巻専修大学も創立30年を迎えます。神田の新校舎もいよいよ着工開始の年となり、都心に大学が回帰する動きが加速するのではないのでしょうか。とくに私は大手町の東京消防庁から通ったなじみもあり、やはり専修大学は神田にあるというのが魅力です。この点をより強くアピールしていければと考えています。いまの学生、そしてわれわれ校友も胸を張って、母校に誇りを持てるような活動につなげていきたい、と思っております。

(2017年11月9日 神田校舎にて)